

# アメリカ労働史から捉えた「白人労働者」

——「トランプ現象」を読み解くカギとして

南 修平

---

はじめに

- 1 「トランプ現象」前後における「白人労働者」論
- 2 アメリカ労働史の取り組み——白人労働者との関係から
- 3 白人労働者の顕在化——ニューヨークの事例

まとめ

はじめに

2016年の大統領選挙でドナルド・トランプが当選を果たした衝撃は未だに続いているようである。中間選挙の状況が細かに伝えられ、日本でもトランプに大統領選挙で勝利をもたらす要因となったラストベルトでの動向が報じられた。今も続くほどのインパクトをもたらしたのは、トランプが政治家としての経験が無いニューヨーク出身の不動産王という異色のキャリアの持ち主であり、いずれ選挙戦から消えるとさえ見なされていたにもかかわらず、支持率を維持して党内レースのみならず本選挙でも勝利したという一連のストーリーにあるだけではないだろう。それよりもむしろ、トランプを一貫して支持し続けた白人労働者——とりわけ熱狂的な支持を連呼する白人男性ブルーカラー労働者の姿が多くの人々に強烈な印象を残したことが挙げられる。実際、選挙戦の途中からトランプを支える最大の根拠として「取り残された人々」「忘れられた人々」たる白人労働者の存在が俄然クローズアップされるようになった。そして、彼らの日常やコミュニティに対する密着取材あるいは参与観察による研究などが数多く出版されるようになった。

そうした中で思い浮かんでくる疑問は、所与の存在として語られる「白人労働者」とはいかなる人々なのかということである。確かに一連の報道やこの間の研究を見ていけば、彼らの肉声を聞き、蓄積された不満や現在置かれている状況という具体像は見えてくる。その一方で彼らの窮状は、一定の時間的経過の中で進行した結果であり、以前は現在とは異なった状態であったということでもある。その時代の彼らは「白人労働者階級」として顕在化することなく、今のような注目は浴びていなかった。そのことは所与の存在として「白人労働者」を措定し、その特徴を論じる危うさを意味しており、歴史的な時間軸の中で白人労働者の様相とその変化を捉える必要性を示している。

そこで本稿では、まず第1節において「トランプ現象」を契機に一気に溢れるようになった一連の報道や学術的研究の成果、それらの特徴や傾向を確認しつつ、そこに不足している問題点を検証

する。次に第2節では、アメリカにおける新労働史学批判の議論に注目し、そこから現在の状況を読み解くために必要な視点を考察する。第3節では、歴史の中で「白人労働者」が顕在化した事例として、1960年代半ばのニューヨークに注目し、その具体例を通して白人労働者はいかなる時に立ち現れるのかを考察する。最後にアメリカ労働史の観点から「白人労働者」をどのように捉えるべきかを論じ、そのレンズを通じて「トランプ現象」を分析すれば、そこから何が見え、何が課題として提示されるかを考えていきたい。

## 1 「トランプ現象」前後における「白人労働者」論

白人労働者とそのコミュニティの具体像を自らの経験に基づいて語ったJ・D・ヴァンスの『ヒルビリー・エレジー』は、トランプが共和党の大統領候補に事実上確定した最中で出版され、全米でベストセラーになり、日本でも邦訳が行われるなど大きな話題を呼んだ<sup>(1)</sup>。この本が人々の関心を引き起こしたのは、ヴァンスの家族や友人をめぐる一連の語りの舞台が、トランプ勝利の原動力となったラストベルトの一角を占めるオハイオ州であったためである。同州の他、ペンシルヴァニアやミシガンなどのラストベルトでトランプ旋風が巻き起こり、この時トランプへの支持を明確に示したのが炭鉱や鉄鋼、自動車という長年にわたってこれらの地域を支えてきた産業で働く(働いてきた)白人労働者であった。ヴァンスの語りはこうした人々に重ねられ、コミュニティの荒廃や家族の崩壊、友人の離散という白人労働者が直面している困難を大いに顕在化させることになったのである。

オハイオの小さな町で育ったヴァンスの語り、この地方に暮らす人々の生活文化や日常の中に表れる価値観を詳細に表したことから、その独特な在り方がトランプ勝利と相俟って改めて注目的になり、白人労働者の特徴を様々な観点から報じ、論じる動きはさらに熱を帯び、メディアやアカデミズムの間で高い関心を呼んだ。その中で目立った傾向は、白人労働者のコミュニティを一定期間詳細に観察・調査し、直接人々の声を集めて彼らの特徴や文化を明らかにしようとする社会学的研究である。ジャスティン・ゲストはその成果を最も精力的に発信し続ける一人であろう。ゲストは大統領選挙の本選キャンペーンがいよいよ熱を帯びる2016年10月に出版した著書においてイースト・ロンドンとオハイオ州ヤングスタウンというかつて白人労働者コミュニティとして活気に満ちていた英米両国の地で、エリートとされる35人を含む120人に対するインタビューを行い、彼らの政治観や人種意識、不満や不安を構成するものの抽出を試みている<sup>(2)</sup>。そして、記述の多くに労働者や住民の語りを挿入し、それらに人口の変化や産業構造、失業率など各種統計資料を重ねて、彼らが語る状況がいかに急速に変わりゆく街の様子と相互に関係しているかを示そうとする。同時期に著されたアーリー・ホックシールドの研究はさらに濃密なコミュニティへの密着である。ホックシールドは南部ルイジアナ州で支持を広げるティー・パーティーの運動に呼応する白人労働者

(1) J. D. Vance, *Hillbilly Elegy: A Memoir of a Family and Culture in Crisis* (New York: Harper, 2016) (関根光宏、山田文訳『ヒルビリー・エレジー——アメリカの繁栄から取り残された人々』光文社、2017年)。

(2) Justin Gest, *The New Majority: White Working Class Politics in an Age of Immigration and Inequality* (New York: Oxford University Press, 2016)。

やその家族・友人らに密着し、同地の化学工場による無責任な操業のためにガンを患うなど深刻な健康状態に陥った人々たちの様々な想い——荒れ果てていくコミュニティ、補償に応じない企業、環境規制などで介入を強める連邦政府とそれに反対する地元政治家——を詳細に描く<sup>(3)</sup>。

これらはいずれも白人労働者の心情が率直に吐露され、密着度が深いことで彼らが暮らしてきたコミュニティとその日常が細かに伝わるものである。家の調度品やそこから分かる特徴的な趣味、インタビュー時での立ち居振る舞いやちょっとした所作までその観察範囲は広く、驚くほど細かい。それゆえに、白人労働者とそのコミュニティでの生活が以前と比べて格段に厳しい状況に置かれていることが分かるのである。日本語によるこうした仕事では、朝日新聞記者の金成隆一によるラストベルトの労働者に対する継続的報道が挙げられる。トランプ現象が大きな話題を呼ぶ以前の2015年から取材を始めた金成は、アメリカ社会における格差の拡大が最も如実に表れている部分として白人ミドルクラスの崩壊に注目し、その実態をラストベルトに求め、この間でもオハイオ州トランブル郡ウォーレンに3か月間住み続けて行った密着取材の成果を出版したばかりである<sup>(4)</sup>。金成の一連の報道は、この地域に生きてきた白人労働者の矜持とそれが崩れゆく日常への不安が彼らと同じ目線で捉えられていることが最大の特徴と言えるであろう<sup>(5)</sup>。

直接労働者の声を拾い集め、コミュニティの様子をつぶさに観察することでかなりの程度において白人労働者の具体像を浮かび上がらせている点がこうした研究・報道の最大の成果である。白人労働者が直面する厳しい状況に対して、彼らを票田にしてきた民主党政治家たちはそれを放置し、結果として蓄積された不満がトランプという新奇な候補者への支持に向かったという流れがあるため、こうした研究や報道がその窮状を明らかにしている意義は少なくない。

ただし、ゲストやホックシールドがその先に提示する方向性や認識については違和感がどうしてもつきまとう。白人労働者がトランプ支持へ雪崩れ込んだことに続いて、ヴァージニア州シャーロットヴィルで南軍将軍ロバート・E・リーの像の撤去をめぐる賛成派と反対派の間で衝突事件が発生し、白人至上主義者の暴挙によって1名が死亡する事件が起こるなど、白人至上主義者によるヘイトに満ちた事件が目立つようになった（もちろんそれ以前からヘイト・クライムは増加をたどっていたが）。白人至上主義者の不気味な台頭はトランプに熱狂する白人労働者がそうした勢力と同一視される安易な傾向を高めたが、彼らの研究はそのことを強く意識しており、白人至上主義者を激しく非難する白人労働者の声を導入しながら、トランプを支持する白人労働者が決して白人至上主義者に与するものでない実態を強調している。にもかかわらず人種差別的言辞を臆せず弄し、白人至上主義者にも曖昧な態度をとり続けるトランプを彼らが支持するのはなぜか、彼らは何に不安を抱き、誰に対して不満を持っているのか——注目すべきはそこであるという問題意識がこれら社会学者に共有されているのである。その問題意識の重要さは十分理解できるが、問題はさらにその先にある。

(3) Arlie Russell Hochschild, *Strangers in Their Own Land: Anger and Mourning on the American Right* (New York: New Press, 2016).

(4) 金成隆一『ルポ トランプ王国——もう一つのアメリカに行く』（岩波書店、2017年）、同『記者、ラストベルトに住む——トランプ王国、冷めぬ熱狂』（朝日新聞出版、2018年）。

(5) 渡辺由香里も白人貧困層に対する取材を精力的に行い、トランプ支持の理由を探ろうと現地から積極的に情報発信した一人であろう。

彼らの調査では、白人労働者が窮状の原因や怒りの矛先を明確な因果関係もなく黒人やヒスパニック、移民に結び付けて非難する場面に数多く遭遇する。もちろん、その言辞だけで彼らを「差別主義者」として退けるのは単純であろう。その一方で、社会学者たちも言及しているように、黒人やヒスパニックらマイノリティは白人労働者以上の窮状に苦しみ続けてきたのであり、だからこそ、社会学者たちは白人労働者と黒人やヒスパニックの間に橋をかけ、そのためのアプローチを民主党やリベラル勢力が粘り強く追求していくことを訴える。このような主張は労働法学者のジョーン・C・ウィリアムスにも見られる。ウィリアムスはエリートが白人労働者を理解すべきことを強調するとともに、白人労働者の状態に視線を向けてこなかったことを自省し、白人労働者階級に対する具体的なアプローチ策を著書の中で提言するのである<sup>(6)</sup>。

このような姿勢はヘイトが跋扈し、貧富の格差がますます広がるアメリカ社会の実態を考えれば、渡辺靖が指摘するように研究者としての重要な姿勢である。しかしそれでも違和感が抜け落ちないのは、こうした研究に歴史的視点が欠落していると感じるからである。渡辺が自身の仕事も含めて指摘する通り、彼らのような仕事は今に始まったものではなく、これまでも行われてきた<sup>(7)</sup>。筆者が専門とするニューヨークを対象とした労働史での関連で見れば、ジョナサン・リーダーの研究が思い浮かぶ。リーダーはブルックリン・カナシー地区で1975年から77年までイタリア系・ユダヤ系コミュニティに密着して観察を行い、彼らの怒りと不安を明らかにした。それは、労働者が圧倒的に多いイタリア系と高学歴で比較的豊かなユダヤ系の白人たちがカナシー周辺での黒人やヒスパニックの急増を脅威と感じ、保守的主張を展開する政治家への支持を強める姿であり、自らの窮状は「マイノリティに対する必要以上の配慮」によって引き起こされ、配慮に依存しながらさらなる「施し」を要求する「怠惰な」マイノリティへの怒りであった。

また、白人労働者や彼らのコミュニティに注目する社会学的研究では、インタビューや量的調査のデータから彼らの独特な文化や人種・ジェンダー・政治に対する意識を論じるものも多い。例えば筆者が研究対象とする建設労働者についてのものである。建設現場では専門技術を持つ熟練工が頂点に立ち、そこは白人男性の集中度が極めて高い。日々危険な現場で働きつつ賃金や仕事の需要面で非熟練工よりも優位に立つ彼らの世界について、彼らが集う酒場を拠点に観察を行ったルマスターズの研究はその代表であり<sup>(8)</sup>、男たちで占められる現場に立った数少ない女性の視点から彼らの世界を捉えたクリス・パープやジェーン・レイター、フランシン・モッシオらによる研究もある<sup>(9)</sup>。1974年にカテゴリーごとで集めたデータの結果から白人労働者を論じたレヴィソンは2013

(6) Joan C. Williams, *White Working Class: Overcoming Class Cluelessness in America* (Boston: Harvard Business Review Press, 2017) (山田美明, 井上大剛訳『アメリカを動かす「ホワイト・ワーキング・クラス」という人々——ポピュリズムを支える“真・中間層”の実体』集英社, 2017年)。同様の姿勢はゲストの最新刊でも見られる。Justin Gest, *The White Working Class: What Everyone Needs to Know* (New York: Oxford University Press, 2018), especially, 155–158.

(7) 渡辺のウィリアムスの著書に対する言及は前掲邦訳版の「あとがき」に詳しい。

(8) E. E. LeMasters, *Blue Collar Aristocrats: Life-Styles at a Working-Class Tavern* (Madison: University of Wisconsin Press, 1975).

(9) Kris Paap, *Working Construction: Why White Working-Class Men Put Themselves—and the Labor Movement—in Harm's Way* (New York: Cornell University Press, 2006); Jane LaTour, *Sisters in the Brotherhoods: Working Women Organizing for Equality in New York City* (New York: Palgrave Macmillan, 2008); Francine A. Moccio, *Live Wire: Women and Brotherhood in the Electrical Industry* (Philadelphia: Temple University Press, 2010).

年にも同じ方法論を用いてやはり白人労働者の様々な傾向を分析している<sup>(10)</sup>。つまり、白人労働者や彼らのコミュニティの特徴を抽出し、それらを分析する研究はこれまで少なからず行われてきたのであって、それを考えれば、白人労働者の日常に変化が生じ、そこからくる不満や不安が表出することはこれまでも見えていたはずである。そこに継続性が確認できないのは、白人労働者の捉え方が一地点的な現象としてとどまり、変化の傾向やそのことが歴史的に何を意味するかが問われていないということではないだろうか。

ゲストやホックシールドの研究とは違った方向から白人の不満に注目する研究として同時期に現れたキャロル・アンダーソンを見てみよう。再建期から2016年の大統領選挙までのアメリカ史において、いかに黒人の権利が「白人の怒り (White Rage)」に退けられ、その中で黒人らマイノリティが苦闘してきたかという主張を書き連ねるアンダーソンは、窮状の度合いを深める白人労働者に対してゲストらのような視線を向けていない<sup>(11)</sup>。アンダーソンのような主張の背景には、今に至って白人労働者の窮状がことさら強調され、白人至上主義者ほど極端ではなくとも、自らを見捨てられた存在であると同定し、明確な根拠もなく、黒人たちは我々が並んでいる列に割り込んでいくといった形で不満を噴出させる白人労働者に対するゲストらの立場が考えられる。黒人たちはそれ以前から白人労働者より劣悪な状況にあったことよりも、白人労働者の窮状への注目とそれに対する理解が強調され、白人労働者が黒人や移民に向ける偏見に基づいた怒りに対しては決して白人至上主義者と同種のものではないという主張が先行する事態は、黒人側からすれば素直に受け止められるかと言えば疑問である。アンダーソンは2016年の大統領選挙でトランプ支持者が怒りの矛先を黒人に向けたその様子は1968年の大統領選挙でジョージ・ウォレスが立候補者として現れた時のそれと同様であると受け止める。そして、その意味するものは、黒人は公的扶助を受ける価値はなく、実際にはアメリカ人ですらないということだとアンダーソンは断じるのである<sup>(12)</sup>。

白人労働者とそのコミュニティが直面している状況以上にないがしろにされてきた側は社会学者らの主張に安易に同調せず、フラストレーションをさらにため込んでいる構図がここからは見て取れる。この溝こそ深刻である。白人労働者とそのコミュニティに足を運んで多くの声を集め日常の様子を細かく観察する研究や報道が現在地の具体的状況を詳細に伝えるものではあっても、それが歴史的過程の中での変化の結果であることは、白人労働者の世界に注目する社会学的研究が決して新しいものでないことから分かる。重要なことは、過去の研究が出てから現在に至るまで白人労働者を取り巻く世界が経験してきた様々な変化であり、その時間軸の中で何がどのように変化して不満が蓄積されたのかをあらゆる側面から分析することである。考えるべきは、黒人たちが長年喘いできたような状況に追い込まれてもなお、白人労働者とその不満のベクトルを搾取と富の権化たる「エスタブリッシュメント」に加え、その著しい犠牲になっている黒人やヒスパニック、移民にも向けるのはなぜかということである。

(10) Andrew Levison, *The Working-Class Majority* (New York : Penguin, 1975) ; idem, *The White Working Class Today : Who They Are, How They Think and How Progressives Can Regain Their Support* (Democratic Strategist Press, 2013).

(11) Carol Anderson, *White Rage : The Unspoken Truth of Our Racial Divide* (New York & London : Bloomsbury, 2016).

(12) Ibid., 169.

アメリカ史を振り返れば、今回の「トランプ現象」のように白人労働者は常にその存在を顕在化させてきたわけでない。それは、ある一定の条件の中でその姿が露わになり、自分たちの存在への承認を求めるのである。であるならば、歴史の中で彼らの何が変わり、それが強い不満となって人種偏見や移民排斥あるいはセクシズムとも呼応しながらその姿が立ち現れ、展開するのか——それらを歴史的視点で分析することが必要不可欠である。

## 2 アメリカ労働史の取り組み——白人労働者との関係から

先に、歴史的視点で分析することが必要と述べたが、それではあまりに一般的過ぎ、社会学的研究が抱える問題点を克服するための指摘とは言えない。では、歴史的な時間軸の中で白人労働者を捉えるとはどのようなことを意味するのか。本節では筆者の専門分野であるアメリカ労働史に焦点を絞り、「歴史的視点」の具体的中身を明らかにしていきたい。

トランプが大統領選挙に勝利して以降、アメリカ労働史の在り方をめぐる議論とそこで提示されてきた課題について、筆者はこれまで幾度か論じる機会があった<sup>(13)</sup>。ただし、ここでは、アメリカ労働史に提起された研究上の問題点として今年度の歴史学研究会年次大会でのシンポジウム及び同研究会の大会特集号で触れた3点に注目し<sup>(14)</sup>、それらをめぐる議論をたどることでアメリカ労働史はいかなる分析視角を用いて白人労働者を捉えてきたかを考察の中心とする。アメリカ労働史が抱える研究上の課題3点は、新労働史学の在り方をめぐる議論から抽出したものである。法律や政治制度を起点に政府・企業と労働組合の関係を分析する旧労働史学から、ローカルな地に生きる一般・非組合員、あるいは移民など個々の無名労働者の日常やその独自の文化に焦点を移した新労働史学は1960年代の終わりから70年代を通して優れた研究を生み出してきたが、他方でその研究の在り方に対しては早くから批判が出ていた。それらは、①労働者自身が主体的に人種差別を行い、それを支えてきたこと、②労働現場やコミュニティ、権力関係などに現れるジェンダーとその影響に対する視点不足、③文化の役割の重視と記述の細分化による国家や政治権力との関連、階級構造に対する関心の希薄化である。

①については、新労働史学の中心であったハーバート・G・ガットマン自らが労働者の人種主義に対する視点の弱さについて言及しており<sup>(15)</sup>、そのことがより広範囲な形で取り上げられ、議論されるようになったのはガットマンらの新労働史学以降に労働史を担うようになった世代によってである。その典型は1993年に『国際労働者階級史研究』で組まれた産業別組織会議(CIO)と人種に関する特集が挙げられる。第二次世界大戦後、CIOがアメリカ南部地域で打って出た組織拡大キャンペーン——オペレーション・ディクシーをめぐってゲイリー・ガースルはその失敗の主た

(13) Shuhei Minami, "In Search of New Direction: Labor History in an 'Era of Trump'," *Rikkyo American Studies* 39 (March 2017), 183-283; 南修平「揺れる白人ブルーカラー労働者——「疎外」と「包摂」の間で」日比野啓、下河辺美知子編著『アメリカン・レイバー——合衆国における労働の文化表象』彩流社、2017年。

(14) 歴史学研究会のシンポジウムは2018年5月27日に行われ、シンポジウムのテーマは「生活のなかの労働と社会関係」であった。報告内容の詳細は以下参照。南修平「生活世界を捉えるということ——ニューヨーク港湾地区に生きる労働者とその日常」『歴史学研究』976号(2018年)、112-122頁。

(15) David Roediger, "What Was So Great about Herbert Gutman," *Labour* 23 (Spring 1989): 257.

る原因の一つが白人労働者の人種主義にあることを指摘し、その人種主義は白人であるという優位性に基づくもの——白人であれば黒人よりも高い賃金を得られ、黒人がそこに割って入ることは自らの地位を落とすことにつながるという経済的な恐れ——の他に、自らが支配的地位を得ているコミュニティに黒人が加わることへの脅威など様々なレベルでの人種混交への恐れを考慮すべきと強調している。異人種間の性的交渉や地域に黒人が入り子ども同士で遊ぶようになることへの嫌悪の強さにも言及しながら、ガースルはこうした恐れを抱く白人たちはその多くが世紀転換期にアメリカへ渡ってきたイタリア系やユダヤ系など南東欧系の移民労働者であることを指摘する。彼らにとって重要であったのは、実際にはそれぞれの移民集団間にある差異を脇へ置いて「アメリカ人」——白人になることであり、黒人であることを蔑むアメリカ社会の一員として一定の意味と地位を獲得することであると主張するガースルは、だからこそ、第二次大戦期に南部から都市部に大量に移住してきた黒人を徹底的に排斥する先頭に立ったのが、未だ自らの地位が安定しない、それでも今やアメリカ人となったこれら白人労働者であったと言うのである<sup>(16)</sup>。

こうした白人労働者の実態に関して、1950年代のデトロイトを取り上げたトマス・J・スグルーが提起する研究上の視角は、現在注目されている白人労働者について見る場合、多くの示唆に富む。スグルーは1990年代半ばにははっきりと荒廃が進んでいたラストベルトに注目し、その原因を探るために最も適した場所としてミシガン州デトロイトを設定した。そしてラストベルトの荒廃を読み解くカギとして「歴史的視点」の必要性を主張し、デトロイトがかつての経済的・政治的優越性を失った要因は、政策、住宅隔離、社会福祉プログラム、脱工業化など一つではなく、「戦後の人種と住宅、そして労働をめぐる問題が複雑に絡み合った歴史を明らかにすることを通じてのみ、今日の都市とその貧窮化した住民がおかれた状況を完全に理解しそれに立ち向かうことができる」と訴えた<sup>(17)</sup>。

ガースルやスグルーの問題意識は、新労働史学が国家や組合という大きな構造から描く歴史では注意を払われてこなかった人々の能動的な姿を描く一方で、「アメリカ人＝白人になる」ことで黒人労働者と自らの間を隔て、人種主義の強化に加担してきたことへの視点が欠けているところから生じている。「アメリカ白人」になるとは、移民労働者が組合を通じて国家との距離を縮め、国家から様々な施策を引き出して自らの地位や生活を向上させ、黒人との差別化を図ることで実現されるものであった。国家へ自らが包摂される形で人種主義が白人労働者の中に形成されていく過程は、とりわけ大恐慌を経た後のニューディール期に顕著であることを彼らは強調する<sup>(18)</sup>。ガースル

(16) Gary Gerstle, "Working Class Racism: Broaden the Focus," *International Labor and Working Class History* 44 (Fall 1993). ここでガースルが言う「白人になること」についてはトマス・J・スグルーも強調する点である。1940年代から60年代にかけてのデトロイトにおける南東欧系移民の第二、第三世代の労働者が有する人種主義に焦点を当てるスグルーは、彼らは「まだ白人になる前のエスニック集団」であり、彼らにとって重要なことは、完全な白人性を身につけ、白人になることでアメリカ社会の主流に加わり、それがアメリカ人になること意味していたと主張する。Thomas J. Sugrue, *The Origins of the Urban Crisis: Race and Inequality in Post War Detroit* (Princeton: Princeton University Press, 1996), 9 (川島正樹訳『アメリカの都市危機と「アンダークラス」——自動車都市デトロイトの戦後史』明石書店、2002年、25頁)。

(17) Sugrue, *The Origins of the Urban Crisis*, 4-5 (川島訳『アメリカの都市危機と「アンダークラス」』19頁)。

(18) 人種主義の強化や黒人労働者との関係への考察は少ないが、エリザベス・コーエンの研究も同様の問題意識が反映された代表的研究として挙げられる。コーエンは種々の違いを持つ移民集団がニューディール期において組合

が指摘するように、ニューディール期以降の労働者の日常生活が、連邦や州など様々なレベルの公権力との関係を抜きに成立しえないことは明白であり<sup>(19)</sup>、だからこそ、新労働史学以降の批判は、人種主義への加担と国家へ包摂が有機的かつ構造的に機能していることを重視し、新労働史学に対し、先に確認した批判点の③——国家や構造的な問題への注意不足——を意識したのである。

ラストベルトの衰退は1990年代にはすでに明らかであったにもかかわらず、それらが政治家や学者の議論から抜け落ちていることを指摘するスグルーは、第二次大戦期からそれ以降における地方と全国レベルでの政治という大きな文脈の中で、人種を社会的構築物であるだけでなく政治的構築物として捉えることを主張する<sup>(20)</sup>。第二次大戦期に黒人が北部や西部の都市へ流入してくる中で、都市全体や労働現場の秩序にどのような変化が生じ、白人・黒人間での住居の物理的な隔離がどんな影響をもたらしたのか、脱工業化が進んで活気を失っていくデトロイトに生きる人々の関係はどう展開したのか——連邦・州政府や自動車産業を中心とする大企業や中小企業の雇用主、それらで働く労働者を組織化する全米自動車労組(UAW)という大きな組織単位の動きから、ローカルなコミュニティ内での具体的人種関係までを歴史的な観点で捉えることによってラストベルトの都市が迎えている状況が見えるとするスグルーの視点は、21世紀のラストベルトを考える場合にも当てはまる。「今日の都市とその貧窮化した住民がおかれた状況を完全に理解しそれに立ち向かう」ためにラストベルトに目を向ける時、スグルーらの指摘は重要である。

ゲストやホックシールドの調査は、白人労働者の人種や階級、ジェンダーに関する意識や労働倫理、日常におけるキリスト教信仰と教会の位置づけ、持ち家に対するこだわりや社会生活を送る上で優位におく振る舞い(クレジットや各種請求書への滞りない支払いなど)といった、様々な価値観や規範意識、コミュニティの文化を引き出す。しかし、それら個人・集団間で大切にしてきた日常生活の中の文化は、彼らの生きてきた歴史や今も暮らす地で政治的・経済的・社会的にいかなる役割を果たしたのか、それはその中にはいない人々にどう作用したのかという点と関連付ける必要がある。「取り残された人々」の過去と現在をより大きな歴史的な文脈の中に位置づけ、かつての「より良き日々」がどのような政治的・経済的条件によって可能となっていたのか、その状態は家庭内でいかなる権力関係を築き、労働現場での雇用主との関係につながっていたのか、そこでの黒人と白人の関係はいかなる状態にあったか、そしてそれらの秩序が日常を貫徹し機能する中で人種意識はどうつくられたのか——こうしたことそれぞれを、ラストベルトを取り巻く全国的な政治との関係で検証しながらその実態を問う作業こそ、「取り残された」人々の社会的地位の歴史的変遷を明らかにし、現在の不満をより大きな枠組みで理解することに資するのではないだろうか。

シカゴ南西部の白人労働者コミュニティであるベルトウェイ(仮名)で4年に渡る観察を行った

---

の一員になること——その主たるものはCIO系の組合——を通じて「文化的統合」を果たしながら、大きな政府たる連邦が打ち出す施策によって自らの地位と生活の防衛と向上を図ろうとする様子を大衆文化とも関連付けながら描く。それは「アメリカ人」の一員として自らを語り、振る舞うことで移民同士の違いを意図的に覆い隠すことでもあったと言える。

(19) Gary Gerstle, "The Working-Class Goes to War," *Mid-America: An Historical Review* 75, no. 3 (Oct. 1993), 305-305, 322; idem, *Working-Class Americanism: The Politics of Labor in a Textile City, 1914-1960*, With a new preface by the author (Princeton: Princeton University, 2002), 331-333.

(20) Sugrue, *The Origins of the Urban Crisis*, 9-13 (川島訳『アメリカの都市危機と「アンダークラス」』26-33頁)。



マリア・ケファラスは、自らの研究をスグルーら歴史家に対置するものとして位置づけている。ケファラスは1996年以降の歴史家による白人労働者の研究は、都市においてエスニックな紐帯に基づくコミュニティを築いていた白人労働者が、黒人の流入によって様々なものを失い、住環境をはじめ秩序が乱れることを恐れる姿であり、その恐れから暴力を行使するものとして描いていると強く批判する。歴史家の叙述は、苦勞して手に入れた持ち家を守り、コミュニティの拠り所たるカトリック教会の教区の維持を熱心に願う白人労働者の姿であり、その行きつく先は、極度な人種差別主義者として彼らを理解する道へ導くものと断じるのである。それに対してエスノグラファーの自分はベルトウェイ住民が苦勞して作り上げた、時に温かく、愛国的で、開放的かつ活気に満ち、時に怒りに満ち、嫉妬深く、頑固で、無知なベルトウェイの世界を描き、そこで人種関係がどのようにつくられ、住民が持つ複雑な人種観が住民の間に極めて顕著な「場所への意識 (sense of place)」を規定している様子を明らかにするとしている。そして読者は黒人やヒスパニックに厳しい態度を示すベルトウェイ住民が、自身の子どもたちには肌の色で人を憎んだりしてはいけないと強く教えていることに最も驚くだろうとし、ベルトウェイ住民は自由や公正、正義といったアメリカン・ドリームを信じている人たちなのだという<sup>(21)</sup>。

ケファラスのような労働史家の断罪をしないものの、ゲストやホックシールドらの研究の基調はケファラスの立場と類似性が強いと感じる。ケファラスが「場所への意識」という心性を重視する点では、「政治における感情」を強調するホックシールドも同様である。感情に基づいて自己の利益を主張する白人労働者たちは大企業や富豪の強欲を罵るかと思えば、黒人やヒスパニックを列に割り込む不屈き者と非難し、オバマ大統領夫妻も同類として標的にする。ホックシールドの調査に登場するルイジアナの白人たちは素朴かつ親切で、敬虔なクリスチャンであり、時に粗野で、偏見を持ち、その言動だけを聞けば矛盾だらけである。だからこそ「単純で知性に欠けた田舎者」という偏見を助長させ、それが断絶を生むため、合理的帰結だけで生きているわけではない彼らの複雑な感情や人生を捉えることで共感と理解を示す必要性を社会学者たちは訴えるのであり、それ自体は理解しうることである。しかし、彼らの人生は様々なレベルでの権力闘争の中で影響され影響を与えながらの産物であり、歴史的な地点が異なれば吐露される感情も同じではなく、常に変化する側面を持っている。ケファラスが「場所への意識」を重視するならば、その場所はどのような条件で築かれ彼らの所有物となったかを様々な権力関係から検証する必要がある。そうした権力関係の下でハードワークし結果として得た自宅やコミュニティでのあらゆる生活を白人男性労働者とその家族は愛するのであり、黒人やヒスパニックを意識する必要のない環境で子どもを育てながら「人種偏見」はいけないと言っているのである。彼らがハードワークしてきた職場では彼らはどのような地位にあったのだろうか。人種平等を説く彼らが通う教会に黒人は通えたのだろうか。「場所への意識」が白人同士の結合の触媒として働いている実態は、むしろ、歴史の中でそうした環境がいかなる条件で実現したかを、政治や経済、それも全国からローカルなレベルにおいて見る必要性に行きつく。その作業を欠いたまま「共感と理解」が先行するのであれば、それはあまりにナイーブな主張である。

(21) Maria Kefaras, *Working-Class Heroes: Protecting Home, Community, and Nation in a Chicago Neighborhood* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 2003), 3-4.

最後に新労働史学以降の主要な批判点、②労働現場やコミュニティ、権力関係などに現れるジェンダーとその影響に対する視点不足について論じておく。この批判はそもそも労働史の中で女性が果たした役割について論じられること自体が少ない上に、男性労働者は強大な力を持つ資本や公権力との関係の中で独自の文化や価値観を保持しながら能動的に生きる主体として描かれる一方で、労働現場や家庭・地域における女性との権力関係は不問に付されてきたということから強まった。1980年代半ばからジェンダーの視点不足が批判的に検討され始めていたが、1991年にウェイン・ステイト大学で開かれた北米労働史会議が一つの画期となった。同会議のメインテーマは「男性、女性、労働——労働史におけるジェンダーへの視点」と設定され、そこに寄せられた報告は1993年2月に発行された雑誌『労働史』34巻2・3合併号の特集へと発展した。特集の巻頭言でエリザベス・ファウは、同誌への寄稿論文が総じて、「なぜ」女性は働き、働かなかったのか、「なぜ(why)」女性は組織し、男性は女性と別組織に集まったのかではなく、それらが「どのようにして(how)」起こったのかを問うものであり、ジェンダーの視点を用いることで、男性女性双方が自らの生活をどのように認識し、秩序立てていたかをより総合的に理解できるとしている<sup>(22)</sup>。そこには、ジェンダーは労働者の日常生活の中で階級や人種意識と相互に影響し合い、様々な権力関係が水平にも垂直にもいろいろな方向で絡み合っって人々が依拠する秩序がつくられるという問題意識が現れていた。その秩序は法制度から個々の家庭生活でのルールまで多種多様であるが、ジェンダーの視点の重要性を説いた労働史家たちは、そうした秩序の形成をジェンダーの視点を導入することで歴史的に読み解き、秩序それぞれの社会的権能を論じることで労働史の新たな統合的叙述を試みようとする強い志向性を持っていたのである。

ハードワークによって家族を養い、自宅をはじめあらゆる支払いを可能にしてきた歩みを自身の威厳と誇りの根拠にしてきた白人男性労働者は、建設労働者についての社会学的研究やケファラスらの研究でもたびたび登場する。その地位が今や揺らいでいることが彼らの不安を増幅させているのだが、付け加えるべきは、そのような地位につくことで築かれてきた秩序である。稼ぎ手として家族の中心に位置することは家族関係で妻が負うべき役割を規定し、子どもたちに対してはどのような人生を歩み、いかなる家庭を築くべきかというロールモデルを示すことになった。持ち家は妻の献身的な管理によって維持され、それはまた妻自身の役割に対するジェンダー意識を強化した。こうした家族内の関係は白人労働者コミュニティで広く共通するものであり、それが地域全体の秩序として機能することで、安寧が保たれ、「場所への意識」がより深まったのである。

その安寧はいつ頃どんな「脅威」が入ることで揺らぎ始めたのか。女性の社会的地位の変化や様々な労働現場への進出も安寧を支えてきた地域の秩序を乱すものとして稼ぎ手たる男性はもちろんその妻ら女性たちにも受け止められたであろう。白人労働者とそのコミュニティが抱く複雑な感情を読み解く作業とは、彼ら住民の声がいかなる背景から出てきたのか、歴史的な経過の中で観察することである。白人労働者が直面している窮状は経済的困窮に加え、家族や地域内に占めていた優位な地位の揺らぎや、彼らをそうした地位に置くことでかつてはうまく機能してきた地域全体の秩序の変化がある。

(22) Elizabeth Faue, "Gender and the Reconstruction of Labor History: An Introduction," *Labor History* 34, no. 2-3, 169-171.

人々が日常の中で拠り所とする思想や価値観、人と関係をつくる中で注意を払う文化全般がいかに歴史の中で重要なものはE・P・トムスンに強い影響を受けたアメリカ労働史の中で長く語られてきた古くて新しい話題である。本節の最後に再度ガースルの主張を見ておく。ガースルはCIOと白人労働者の人種主義について組合政治を中心に分析するマイケル・ゴールドフィールドを批判する一方で<sup>(23)</sup>、労働者のコミュニティや労働現場、階級の形成とともに文化的アイデンティティについても注意を向ける必要性を主張し、大きな政治的枠組みとローカルな場所の双方から労働者全体を捉えることを提唱している<sup>(24)</sup>。ガースルはこの視点を用いて1914-60年という時間軸の中でマサチューセッツ州ウーンソケットの繊維工場で働く二つの白人移民労働者集団のアメリカ化を考察しているが、それはニューディールから第二次世界大戦を経る中で国家の愛国的な呼びかけに応答し、エスニックな移民労働集団がアメリカ人になり相対的に安定した地位につく過程であった<sup>(25)</sup>。ガースルが言うように、一定の時間軸の中で、あるコミュニティの変化に焦点をしばり、国家や地方レベルの政策を見つ、白人労働者の生活や社会的地位の変化について、人種やジェンダー、そして文化など様々な観点から観察しその実態を明らかにすることこそ、「取り残された」意味とその内容を歴史的な観点から厳密に論じることを可能にするであろう。

### 3 白人労働者の顕在化——ニューヨークの事例

白人労働者の顕在化はもちろん2016年の大統領選挙が初めてではない。実際トランプが白人労働者からの支持を圧倒的に集めるにつれ、彼らの熱狂する姿は過去の事例と盛んに比べられ、論じられるようになった。1964年にバリー・ゴールドウォーターが共和党候補になった時を彷彿とさせるといったものや、トランプが選挙キャンペーンで“Make America Great Again”とともに多用した“The Silent Majority”という文句が、かつてヴェトナム戦争の方針をめぐる窮地に立たされたニクソンがこの言葉を用いて白人労働者から熱い支持を集めて切り抜けたため、そのことと関連付けた報道もたくさん見られた。そして何と云っても、1980年の大統領選挙で“Make America Great Again”を共和党候補のレーガンが初めて選挙スローガンとして用い、これまで民主党支持者だった白人労働者から圧倒的支持を獲得して地滑りの勝利を取めたという事例があったため——彼らはこのことをもって「レーガン・デモクラット」と呼ばれるようになる——それとの比較論・再来論・否定論は非常に目立った。

その中でニューヨークの事例を取り上げるのは、先に述べた南部やラストベルト中心である白人の顕在化と異なるからである（ニクソンのケースは都市部での支持も目立ったが）。つまり、地域的特殊性から白人労働者の顕在化を捉えるのでなく（それも重要である）、大都市部での顕在化が、本稿でこれまで強調してきた「白人であること」が何であるかを示す好例になると考えたためであ

(23) 批判対象となったゴールドフィールドの論文は以下。Michael Goldfield, “Race and the CIO: The Possibilities for Racial Egalitarianism during the 1930s and 1940s,” *International Labor and Working-Class History* 44 (Fall 1993): 1-32. なお、ゴールドフィールドは自身に向けられた批判に反論を試みている。Idem, “Race and the CIO: Reply to Critics,” *International Labor and Working-Class History* 46 (Fall 1994): 142-160.

(24) Gerstle, “Working-Class Racism,” 39.

(25) Idem, *Working-Class Americanism*.

る。ニクソンへの支持をヴェトナム反戦運動に立つ学生への襲撃という劇的な形で表したニューヨークの建設労働者の事例に関しては拙著で論じているため<sup>(26)</sup>、ここでは地下鉄労働者など運輸機関で働く労働者を組織する交通労組(TWU)に焦点を当てる。

トランプは大統領選挙の過程で「エスタブリッシュメント」への敵意をむき出しにし、それはホワイトハウスに巣食う怠惰な政治家、労働者からあらゆるものを奪い取る強欲な大企業、そして民主党の大統領候補ヒラリー・クリントンだとして、繰り返し罵倒した。ここで取り上げる事例で白人労働者の目の敵となったのは市長への就任が決まっていたジョン・V・リンジーであった。共和党の予備選挙を経て本選に出たリンジーは民主党候補者のエイブラハム・ビームと保守党のウィリアム・バックリーを破って1966年1月1日より市長に就任した。1921年にマンハッタンで生まれたリンジーは第二次大戦時に海軍へ入隊し、戦後にイエール大学で法学を修めてから共和党の政治活動に関わるようになると、若手のホープとして頭角を現していった。リンジーは「絹の靴下」と言われる、アッパー・イースト・サイドやグリニッジヴィレッジ、ミッドタウンを含む上流階級の選挙区(第17区)から連邦下院議員に立候補し、1959年1月に市長へ転身するまでその職を務めた。

典型的なWASP出身であり、大富豪ではないものの余裕ある暮らしを営める家庭で育ち、高い教育を受けてきたリンジーは市長就任時で45歳、外見も長身かつ痩身でハンサムという容姿端麗さを兼ね備えていたため、一躍マスコミの寵児となり、『タイム』や『ニューズウィーク』、『ライフ』など有名雑誌の表紙を何度も飾るなど話題に事欠かない人物であった。リンジーの登場までニューヨーク市政は3期12年の長きに渡ってワグナー民主党市政が続き、タマニー・ホールを拠点とするアイルランド系を中心とした労働組合との密な連携で市政が運営され、市民の間で停滞感が広がっていた。そんな状況の刷新には、リンジーこそ最もふさわしいリーダーであり、彼によってニューヨークは新たな時代へ進むという期待感がリンジーの容姿と重ねられ、大いに人気を高めたのである。しかしリンジーは、就任初日から労働者による容赦ない洗礼を受けることになった。

3つの母体に分かれて運営されていた地下鉄が1940年に市主導で統合されて以降、地下鉄やバスで働く労働者は市職員扱いとなっていた。1934年の設立以降これら運輸機関で働く労働者の組合——交通労組(TWU)を率いてきたのはアイルランド生まれのマイケル・キールであった。母国ではアイルランド共和軍(IRA)の活動家であったキールは、ニューヨークへ渡った後に交通労組のリーダーとなって数々の修羅場を経験した叩き上げの指導者であった。アイルランド系の影響が極めて強いニューヨークの他の労組と同様、TWUはワグナー市政をサポートする強力な集票機関として機能し、1958年になるとワグナーはTWUに団体交渉権を与えるなど異例の扱いをするほどその関係を重視していた。実際1960-65年の間でTWUによるストライキはわずか1回だけで、両者の関係は極めて良好であった。2年に1度のペースで行われる労使交渉はクリスマス直前にキールが組合員の前で相場よりも高い賃上げ要求を公言してみせ、その後キールとワグナーが市長公邸で和やかに話し合い、市長から解決策が公示されるというお決まりのシナリオで進められていた<sup>(27)</sup>。

(26) 南修平『アメリカをつくる男たち——ニューヨーク建設労働者の生活世界と「愛国主義」』名古屋大学出版会、2015年。

(27) Vincent Cannato, *The Ungovernable City: John Lindsay and His Struggles to Save New York* (New York: Basic Books, 2001), 78-80.

しかし、次期市長に就任が決定していたリンジーは交渉相手として全く期待できない人物であった。崇高な理想を信じ、その実現に燃えるリンジーからすれば、こうした馴れ合いは不健全そのものであり、真っ先に排除すべき構図に他ならなかった。妥協姿勢を一切見せないリンジーは労使交渉には極めてドライに臨む態度を早々に示していた。これまでの慣行を全否定し、いきなり上からものを言うリンジーの不遜な態度はもともと短気なクイルの怒りを容易に爆発させ、交渉は険悪そのものであった。リンジーの市長就任式直前まで交渉は続けられたもの一向に事態は改善せず、クイルはリンジーに向かって「お前みたいな間抜けとくだらん話をするのはもううんざりだ。ガキっぽいことはやめて大人になったらどうだ？」と言い放ち、ストライキ決行は動かない情勢となった。巨大都市の公共交通機関を支える労働者のストは州裁判所の命令でストップがかけられたが、クイルは裁判所の発行した命令書を記者会見場で即破り捨てた。そしてTWUはリンジーが市長に就任する1966年1月1日の朝に合わせて全面ストライキに入ったのである。法廷侮辱罪に問われたクイルら指導部はスト4日目に逮捕され収監されたものの、クイルは「ふざけちゃいけない、黒服裁判官さんよ。オレは刑務所でくたばったって気にしねえ。ストはやめないぜ」と息巻いた（この頃クイルの健康状態は実際に深刻であった）<sup>(28)</sup>。ストライキは続行され、クイルから交渉を引き継いだ交渉団も当初の要求を引き下げる構えは見せなかった。

全面ストの影響は甚大であり、市民生活が大きな混乱に陥ったことでリンジーは交渉の妥結を急がねばならなくなった。最終的にリンジーは労組側の主張をほぼ全面的に受け入れ、賃上げ額は3年前の妥結額の約2倍に匹敵した。釈放されたクイルは記者会見に現れて勝利宣言をすると同時に今後ともリンジーを「青二才」と呼び続けると言い放った（釈放3日後にクイルは亡くなる）<sup>(29)</sup>。

ここまでの過程はトランプが「反エスタブリッシュメント」を打ち出してそれに白人労働者が呼応した構図と類似していることが見て取れる。実際、リンジーは服装などの外見や出身階級、教育歴といった点で労働者と全く共通性を持ち合わせない人物であった。その意味では労働者と文化的同質性が皆無で、階級的出自も全く異なり、ワグナーと違って労働者に全くリスペクトの姿勢を見せないリンジーは「エスタブリッシュメント」そのものだった。したがってこの時の労働者の反発要因を文化的対立という点から説明することも可能である。社会学者がトランプを支持する白人労働者の価値観や労働倫理など文化的特徴を明らかにし、それらの揺らぎを強調したように。

しかし、より重要なことは、リンジーの市長就任が決定的になる時点でTWUが迎えていた事態はこれまでと異なっていたことを見落とすべきでない。特に組合員の中で黒人やプエルトリカンの割合が急増し、アイルランド系が相対的に減少する傾向が進んでいたことは組合内の出来事にとどまらず、ニューヨーク市内の白人労働者コミュニティ、さらにはアメリカの各都市部で見られ始めていたことであった。TWUは他のCIO系労組と同様に、アメリカ労働総同盟（AFL）系の熟練工組合のようなマイノリティに対する露骨な排除は控え、組織化対象にしていた。しかし実態的には、職種において既存の白人とマイノリティの間に明確な差があり、マイノリティの多くは賃金の

(28) Ibid., 83-84; Joshua B. Freeman, *Working-Class New York: Life and Labor Since World War II* (New York: New Press, 2001), 211.

(29) Cannato, *The Ungovernable City*, 90-93; Sam Roberts ed., *America's Mayor: John V. Lindsay and the Reinvention of New York* (New York: Columbia University Press, 2010), 120-123.

低い清掃夫や切符係につき、熟練工に上がることができないでいたため、その格差に対する不満は組合内部で鬱積していた<sup>(30)</sup>。こうした構図は他のCIO系労組共通の特徴であった<sup>(31)</sup>。ニューヨークを組織の拠点にしていた全米海員労組(NMU)では、黒人船員は船員の中で最も等級が低い司厨部門や客室係に集中し、熱気と騒音と危険が常に伴うエンジン部門はヒスパニックで固められていた<sup>(32)</sup>。CIOのリーダーでもあるウォルター・ルーサーが率い、CIOの屋台骨であった全米自動車労組(UAW)についても人種間の明確な格差はケヴィン・ボイルやスグラーの研究で明らかにされている<sup>(33)</sup>。組合内に厳然と存在していた差別構造は、CIO系労組が黒人労働者に行っていた様々なアプローチすべてを否定するものでなく、AFL系労組が露骨な差別を展開した中での組織化は、それがたとえ積極的な人種平等を目指すものでなくとも、その歴史的意義は退けるべきでない。しかし、結局組合が白人の優位性を確保することを常に優先し、その構造を温存し続けた最大の根拠は一般組合員たる白人労働者の反発と抵抗、差別意識であり、組合もそれに迎合した点は極めて重要である。こうした差別構造が温存されたままCIO系組合と公権力や資本との関係が築かれ、CIOはそのままAFLと合併し、その結果として白人労働者と他のマイノリティの日常に露骨な格差と権力関係が存続したことは重視すべきである。

ニューヨークを拠点にする交通労組に集う白人労働者がリンジーに向けた怒りは、公権力と蜜月の関係を維持し、それを根拠に自らの日常生活を支えてきた秩序を破壊されかねないという不安を表していた。その秩序は労使関係だけでなく、コミュニティ生活全般を支える最大の根拠でもあった。そこには家族同士の関係や子どもたちの養育や教育、地域の教会への募金、消費生活等日常生活全体が含まれていたのである。その日常への強い執着こそ、「場所への意識」と言うべきであろう。リンジーは改革を旗頭にマイノリティから多くの票を獲得して市長になった人物である。秩序の改編をしたがるいけ好かないエスタブリッシュメント——反発はそこにあったのである。

## まとめ

白人労働者の怒りや不安の根拠を探るには近接して詳細な語りを引き出すことだけでなく、それらをより大きな政治情勢や地域のそれに位置づけて見ていくこと、白人労働者が家庭やコミュニティ、職場など身近な場でどのような地位にあるのか、それらは歴史的にどのような過程を経て今に至るのか、その地位は他との関係においていかなる権力関係にあり、その関係は日常の中でどのような権能を持ち、機能しているのか——こうした様々なレベルと観点で個々の具体的語りを分析

(30) Cannato, *The Ungovernable City*, 80-81; Joshua B. Freeman, *In Transit: The Transport Workers in New York City, 1933-1966* (New York: Oxford University Press, 1989), 332-333.

(31) Bruce Nelson, "Class, Race, and Democracy in the CIO: The 'New' Labor History Meets 'Wages of Whiteness,'" *International Review of Social History* 41 (1996): 359-364.

(32) Jerald Horne, *Red Sea: Ferdinand Smith and Radical Black Sailors in the United States and Jamaica* (New York: New York University Press, 2005), 62-63.

(33) Kevin Boyle, *The UAW and the Heyday of American Liberalism, 1945-1968* (Ithaca: Cornell University Press, 1995), Ch. 5; Sugrue, *The Origins of the Urban Crisis*, Ch. 4 (川島訳『アメリカの都市危機と「アンダークラス」』4章).

してみることで、その怒りの持つ意味やそこに現れる様々な社会的関係とその変化が見えてくるのである。

本稿で労働史の議論を見た際、それらの多くは1990年代に集中する。ここから労働史はより統合的な歴史の叙述を試みており、現在までにどのような発展と課題があるかについては今回ふれることができなかった。そこは残された課題である。またアメリカの白人労働者を取り巻く状況について言えば、スグルーやガースルが分析を試みたのはいずれも20世紀前半から1960年代後半で、それ以降の時代でどのような変化に直面したかについて先行研究に対するさらなる分析が求められる。特に、白人労働者の顕在化として語られる1980年大統領選挙の際の「レーガン・デモクラット」とは誰なのか、彼らが顕在化した背景とその特徴については、今回述べてきたような形で分析されたものは、筆者が知る限りではあるが、決して豊富とは言えない状況にある。今回はそこからさらに36年も経た形での顕在化であり、レーガン・デモクラットから今に至る時間軸での分析も求められている。特に労組の影響力とそれを媒介に維持されてきたコミュニティの絆の喪失はポイントの一つである。

今後残された課題に取り組むにあたって一つ付け加えておくべきと思われるのは、生活世界への視点である。社会学者たちが目を向けたのは個々の白人労働者の生き方であり、彼らやそれと近い人々の生きる姿であった。そこには彼ら独自の生活世界があり、その世界への愛着の強さがこれを乱そうとするあらゆる要素への反発として現れていたのである。その強さは合理的に制御されるものでないために、時には反動的な暴力へ転化する可能性をはらみながら（そのような悲劇は防がねばならないが）、大企業や公権力に対する妥協なき反発として展開する可能性も持つ。

いかなる変化の可能性があるかは彼らの生活世界が歴史的どのように形成・維持され、内部や外部との関係はどのように機能し保たれてきたかを見ることのみ明らかにしていけるのではないだろう。今回トランプを支持した人々の底流にあるものは自らが生きてきた場所とそこでの暮らし、そこで取り持ってきた人々同士の関係が崩れていくことへの大きな不安であった（その世界がその外にいる黒人や移民、女性などに対して抑圧的に働いているという点は見落としてはならない）。その意味で生活世界とは人々がそこに脅威を感じた時、鋭く能動的な行動を促すほど我々が生きる日常の中で大きな位置を占めているのである。ラストベルトの人々を読み解く際、この点だけは留意しなければならないだろう。

（みなみ・しゅうへい 弘前大学人文社会学部准教授）